

## 手帖 姫路文学館

Vol.139



ことばの森で  
私をさがす

日本語をもって思索する哲学者よ、  
生まれいでよ。

和辻哲郎「日本語と哲学の問題」  
(昭和四年稿、十年加筆)

姫路市仁豊野に生まれた哲学者和辻哲郎が、論文「日本語と哲学の問題」(昭和四年の小論「日本語に於ける存在の理解」に加筆して「続日本精神史研究」に収録)の結びとした一文です。言語を民族の特性が表れたものとして捉えた和辻は、日本語を通じて日本人の生き方・あり方を振り返りました。

和辻の分析によれば、日本語は論理的な思索の手段としては発達せず、特に詩歌や物語などの文芸における表現として花開きました。その進化は、助詞(てにをは)や助動詞の複雑さに見出され、それを駆使することで、強調・濃淡・余韻を巧みに表現して、繊細な情意を伝えることに特化したと言います。一方、名詞を見ると、たとえば(ななま)と言ったとき、それが一人なのか団体なのか、男女の別も分からず、特定のだれかを言うのか、一般的にと言いたいのかも分からないような「のんきさ」が見出される、と和辻は述べます。また、「知る」や「ある」などのいくつかの自立語をめぐって、それらが実践(例：道を知る)や所有(例：閑がある)といった含みがあることを指摘し、日本人が分別することを強く求めず、感情や体験に重きを置く傾向があることに、和辻は着目するのです。そうして、これを日本語の短所・限界とせず、この発見のうちにオリジナルな考察を広げようとしたのです。

「日本語と哲学の問題」を発表して二年後、大著『倫理学』の刊行が始まります。日本語に看取された特性は本書における重要な議論となり、しかしながら日本人論にとどまらない哲学として語ることが試みられました。冒頭の言葉には哲学者たる和辻の信念がにじんでいます。  
(徳重公美)

# この頃の 史代展

漫画家生活30周年



《描く人》2024年 ©この頃の史代

鳥がとび、  
ウサギもはねて、花ゆれて、  
走ってこけて、長い道のり

2026.  
前期 4/18(土) → 5/10(日)  
後期 5/13(水) → 6/21(日)

監修・福永信 企画・青幻舎プロモーション

日々」に登場するスケッチブック、制作風景を記録した初公開の映像など、この頃の史代の画業のすべてがわかる展覧会です。

**見どころ2**  
貴重なデビュー前の原画

デビュー前の原稿、また高校生の頃に制作した漫画の原画も展示いたします。すでに「この史代」ならではのタッチが、読者を今でもほんわか、楽しい漫画の世界に誘います。

**見どころ3** 「一枚の絵」としての漫画原画

この頃の史代はその初期からアシスタントを起用せず、原稿をすべて一人で描いて

**見どころ1**  
漫画家・この頃の史代の過去最大の展覧会  
大ヒット作『夕風の街 桜の国』のこの世界の片隅に』の原画展はこれまで数多く開催されてきましたが、デビューから現在までを網羅した大規模な回顧展は、本展が初めてです。五〇〇枚以上の漫画原画を展示。膨大な挿絵原画、絵本原画、作品のコンテやメモ、ブログ「この頃の



《夕風の街 桜の国》カバーイラスト、2004年 ©この頃の史代/コアミックス



《こっこさん》1999年 ©この頃の史代/エブリスタ

ています。着色も本人がやっています。また一部を除いて、スクリーントーンをほとんど使用していません。原画で私たちが見ているのは、この自身の手によって描かれた線です。「一枚の絵」として、その線の躍動する魅力、新鮮な色彩の力を感じていただけたらと思います。

この頃の漫画を読んでいて、ふと気づくのですが、彼女の漫画には、一冊も似た作品がありません。

そしてまた、ふと気づいて驚くのですが、この頃の描く漫画は、いつも、ほとんど同じタッチで描かれています。

これが漫画だよな、と思わせる、読者をほっとさせる、あの愛らしいタッチのことです。

四コマ漫画でも、ほのぼののショートストーリーでも、神話ものでも、戦争ものでも、あの絵柄で一貫して描いてあります。戦争ものだから、急にシリアスな絵柄で、とはなりません。

古代や現代、戦争や平和、動物や人間、どんなに世界が違っていても、毎日が必ず続いている、かけがえのない時間が流れている。この頃の描く漫画を通じて、読者はそう感じる事ができます。

この頃の史代は、まだ漫画になっていないことを、誰も手掛けていないこと、手薄なところを探して漫画にしていく、漫画の世界の冒険家です。

だから読者は、彼女の漫画を読むたびに、こんな世界知らなかった！と、いつも思う

**見どころ4** 「読める」展示

連載作品の場合は一話単位、短編は全ページを基本に原画を展示いたします。この頃の構成したストーリーを分断せず、制作しているその時の「漫画家の気持ち」を体感することが出来ます。各単行本のカバーのカラー原画も必見です。

**見どころ5**  
当館のみの描き下ろし作品

姫路会場オリジナルの「あとがき」を展示スペースの最後に展示いたします。



《ぼおるべん古事記 - 天の巻》表紙イラスト、2011年 ©この頃の史代/平凡社

のでしよう。

そして、そんな読者に、彼女は、漫画の中から、こう呼びかけているようです。見慣れたはずの「漫画」という表現が、新鮮な姿に見えてきたでしょ？ ほら、まだこんなに描くことがあるよ、君もこっちに来ない？

一人の漫画家として、この頃の史代が歩いてきたすべての道のりを、この展覧会ではたどりまます。過去の作品だけじゃありません。昨年、そして今年になって描き始めた作品の原画もできる限り展示します。現在進行形の、私達の同時代を生きる漫画家の姿をぜひ体感してほしいと思います。

姫路文学館では、会場の広さの都合から、前期と後期で、ほとんどの作品を展示する予定ですが、見ていただくには、少し面倒をかけてしまいます。でも、この姫路文学館から初めて展示される原画の展示もあります。前期後期どちらを見てくださっても、充実の内容です！（もちろん、両方見ていただくのもうれしいです！）。楽しみに待っていてください。

福永信（本展監修者／小説家）

# 報告

## 企画展「戦後80年 戦時下の大衆文化 ―〈外地〉へのまなざしを振り返る」

1月17日(土)～3月29日(日)

入場者数：2,365人

昭和六年(一九三一)の満洲事変から日中戦争、太平洋戦争、そして昭和二〇年(一九四五)に終戦を迎えるまでの十五年戦争の間に、〈外地〉を通して行われた作家・画家たちの文化活動に注目した展覧会を国際日本文化研究センターとの共催で開催しました。



展示風景

展示室では、中国大陸での兵士や戦場の様子を描いた戦記文学、中国各地や南方の風土や慣習を紹介した書籍、絵画、スケッチ、画家たちの絵をもとに作成された軍事郵便絵葉書、ラップナウ・コレクションなど、約七〇〇点の資料を展示しました。

■井上章一・劉建輝対談「十五年戦争中、作家と画家たちが〈外地〉で何を見て、また国民に何を伝えたか―その歴史と

意味を考える」  
(第3回姫路文学館友の会研修講座として実施)

1月31日(土) 参加者：150人

出演：井上章一氏(国際日本文化研究センター所長)・劉建輝氏(同教授、  
展覧会監修者)

劉建輝氏が展示に即して各章ごとの概要を解説され、それに対して井上章一氏が疑問を呈し、劉氏が応じるという形で進みました。

「麦と兵隊」の歌詞に「徐州、徐州へと人馬は進む」とあり、展示室にも「馬車」という表題の絵がある。〈内地〉では満洲鉄道を大宣伝していたのに、〈外地〉では人馬でないかと納得できない何かがあったのかという疑問に対し、「確かに馬車を描くものが満洲では多い。作家や画家が情緒を求めた結果そうなったのではないか」と分析。満蒙・華北地域で砂漠とラクダの絵が目につくことに、戦後のシルクロード幻想に繋がるのではという問いに対し



劉建輝氏

井上章一氏

ては、「〈外地〉に行く、〈外地〉を知ることで、作家や画家だけでなく国民も含めて大きな想像力を得た時期だった」と、繋がりはあるとしました。

また慰問袋に国内では禁止されているパーマメントをした女性の絵や、統制を受けた中原淳一のイラスト画が入っていたことを指摘されると、「絵葉書アルバムにもその傾向がある。国は方針上その選択ができないが、国民の根底には美に対する要求、女性に対する憧れなどがあり、慰問袋の美人の写真や絵葉書などにつながったのだろう。〈内地〉では統制しているものが〈外地〉では統制が緩いという矛盾の中で成立していたのではないかと考察しました。

が約六割という比率になっている。①は、前線の状況を戦後の国民に伝えるために宣伝、記録として描き、従軍画家の最大の使命を担った。過酷な場面は避け、兵士の雄姿を強調する構図となっている。②は、戦闘の「戦果」として戦場のリアルさを国民に伝えた。③は、出征兵士の日常を親族をはじめ、一般国民に知らせるため、入浴、理容、炊事、娯楽などの様子が描かれ、銃後を安心させる宣伝媒体となった。④は、宣撫は占領各地で現地住民が敵対行動に走らず、協力的であるように、難民保護や治安維持などを行うことであるとの名目から、その成果として「友好」的場面を描いた。⑤は、①から④のノルマを果たしたあと、画家自身が心の赴くままに中国人の生活や異国の風景を描き留めたと思われる。

### 講演会「顕現と隠蔽―軍事郵便絵葉書にみる十五年戦争―」

2月21日(土) 参加者：80人

#### \*講演要旨

満洲事変以降、陸軍省と海軍省は戦意高揚と戦争の記録のために、従軍記者だけでなく従軍画家を派遣した。その数は終戦までの十五年間で延べ数百人になる。記録画は国内の「聖戦美術展」「大東亜美術展」など美術展で展示され国民を鼓舞した。しかし、美術展で展示されたのは彼らの画業のごく一部であり、大半は軍事郵便絵葉書に印刷され、出征兵士や国内の軍属に大量に配布された。絵葉書は前線と銃後を結ぶツールとして国民に愛用された。

十五年戦争下に発行された軍事郵便絵葉書は、次の五つの要素に分けられる。

- ①「戦闘」場面、②戦闘後の戦跡、③陣中生活、④宣撫工作・平和な占領地、⑤各地の自然・人文風景。



劉建輝氏

や「平和」と「友愛」を演出したこと、画家自身が戦争への協力と非協力の間にいたのではないかということ、隠蔽と顕現による戦争認識への影響などがあげられる。

これだけの画家集団が一時期集中的に他国の風景を描き記録したことは、まさに空前絶後といえる事例で、その画業の価値は大いに再考されるべきだろう。

# 報告

## 第11回 藤原正彦エッセイコンクール表彰式

1月18日(日)  
参加者…1000人

応募総数一九三一点の中から選ばれた受賞作九編の表彰式。賞の贈呈に続き、音訳ボランティアグループ「サークルさえずり」の佐藤えりこさん、松下由美さん、伊藤恵美さんが各部門最優秀作三編を朗読。その後、審査員を務めた藤原館長が講評と講演を行いました。

藤原館長は、特に高校生の最優秀作を「思わず嫉妬するほど」と高く評価。また、かつて自身が亡父で作家の新田次郎の未完作「孤愁(サウダーズ)」を書き継ぐにあたり、父と同じ場所を訪れ、同じ体験を試みても、父の眼が捉えたものにはなかなか及ばないことを痛感したことに触れながら、「数学者である自分は物事の本質しか見ないところがあるが、文学では例えば植物や気象などの現象に対する感性や知識が重要となる」と語り、それを見事に果たしている各受賞作を称えました。

講評の要旨は、当館ホームページで受賞作品集とともにご覧いただくことができます。

### ■受賞作および受賞者(敬称略)

【中学生部門】  
最優秀賞／「五時間目という戦場」尾上直孝(姫路市立琴陵中学校2年)、優秀賞／「月桃」平山心陽(青森市立西中学校1年)、佳作「散髪代は三千元」田内颯太(姫路市立広畑中学校1年)

### 【高校生部門】

最優秀賞「本とともに」平野琴葉(兵庫県立姫路西高等学校1年)、優秀賞／「私的一步」河野陽菜(山梨県 駿台甲府高等学校2年)、佳作／「画面に映らない幸せ」塚田あすみ(東京都 青稜高等学校2年)

### 【一般部門】

最優秀賞／「いのちを生きる」日沼よしみ(無職 山梨県南アルプス市)、優秀賞／「つなぐ」井口未来(主婦 東京都練馬区)、佳作／「父への詫び状」二村直子(主婦 三重県四日市市)



受賞者と藤原正彦館長(後列左)、大前晋観光経済局長

## 第14回 KOTOBAMAまつり

### ◆兵庫県立大学環境人間学部

卒業設計展「建築からひろがる風景」

2月14日(土)～20日(金)

協力：兵庫県立大学環境人間学部

来場者…236人

特定の地域や場所が抱えている様々な課題や、テーマにあわせた建築プランを展示。劇場や避難場所、学生寮など制作された模型は多種多様で、設計の詳細や意図はプレゼンテーション映像などによって紹介されました。個性的なコンセプトのもとに提案された設計の数々は、暮らしの中で見える風景を、さらに豊かなものにひろげてくれるような発想にあふれたものばかりで、建築の持つ可能性を感じることができるとなりました。



展示風景

### ◆絵本朗読劇

「おなべおなべにえたかな？」

3月7日(土)・全4回公演

出演：兵庫県立姫路工業高等学校 演劇部

来場者…計70人

絵本「おなべおなべにえたかな？」(こいでやすこ作 福音館書店)の世界を、「朗読劇」という形で表現。考えぬかれた独自の演出と、まるで登場人物たちが絵本の中から飛び出してきたかのような熱の

こもった演技は、観客の心を掴み、作品世界へと誘いました。会場には小さなお子様から大人の方まで幅広い年齢層が集まり、大変にぎわった時間となりました。



絵本朗読劇

## 第17回如月まつり

2月18日(水)・19日(木)

来場者…673人

姫路文学館の東隣の男山八幡宮で毎年行われている厄神祭にあわせて開催する恒例行事。今年も、全館無料開放を行い、



古本市

展示と共に楽しむことができ、イブライも多くの方に挑戦していただきました。古本市も盛況で、来館者に恵まれた二日間になりました。

# 報告

## 第38回 和辻哲郎文化賞授賞式

3月1日 姫路市市民会館大ホール  
 【一般部門】日比嘉高著『帝国の書店―書物が編んだ近代日本の知のネットワーク』(岩波書店)  
 【学術部門】渡名喜庸哲著『レヴィナスのユダヤ性』(勁草書房)

授賞式では、ロバートキャンベル氏(一般部門選考委員)と関根清三氏(学術部門選考委員)による選考評の発表後、清元秀泰市長から正賞蒔絵源氏絵千姫羽子板と副賞百万円が受賞者に贈られました。



一般部門受賞者の日比嘉高氏(左)と学術部門受賞者の渡名喜庸哲氏(右)

二人の受賞者は、受賞の喜びを伝えるとともに、著者自ら受賞作を紹介。日比氏は、著作の意義に触れて、環太平洋というスケールで本屋の歴史を示したことで、本が読者と出会う最前線としての「町の本屋(小売書店)」を研究の対象としたこと、そして戦前から戦後という時間的経過も俯瞰しながら研究を構築したことを伝え、(人の命よりも長い、本の命)が今もなお私たちの文化の歴史を紡いでいると結びました。

続いて渡名喜氏は、レヴィナスが構築しようとした普遍的な哲学と、その源泉にあるユダヤ人という彼のアイデンティ

ティの関係を明かそうとしたという執筆の動機を紹介。レヴィナスが伝える(他者を打ち砕くことも辞さない正義)の弱さも強調しつつ、言葉の意味を慎重に見極める態度、批判することをおそれない態度で、自分自身が考え続けることの重要性を語りました。



鷺田清一氏

記念講演会では、昨年の受賞者である鷺田清一氏が「『しんがり』の心構え―地域社会と『私』と題して、現代社会に必要とされるリ

ダーについて語りました。

よく使われるスローガンとなった「ワーク・ライフ・バランス」。氏はこの語が喚起する違和感に触れながら、仕事と生活は対立するという考え方が浸透したと指摘。さらに、生活に欠かせないこと(例えば、教育、出産、不和の調停など)を公的サービスが代行するという近代社会の仕組みによって、市民の生活力(自分で問題を解決する力)は低下してきたのでは、と語りました。そのうえで仕事と私生活の間で空洞化してしまった生活共同体(地域社会)に着目する氏は、その活性化の方法として、ラグビー型の役割共有や、「フォロワーシップ」「請われれば一差し舞える人物になれ」という梅棹忠夫氏の言葉、登山においてはリーダーこそが最後尾を務めるというイメージとともに「しんがり」の本質を伝えました。話題はこれから生まれてくる人々(未来)に向けて価値を判断することの重要性にも及び、示唆に富んだ講演に、会場は大きな拍手で包まれました。

## おすすめの1冊

著者前田速夫氏は、一九六八年に東京大学を卒業してすぐに「新潮」編集者となり、のちに編集長となった人である。

本書は、定年後、一度文学から離れて民俗学方面の研究に取り組んできた著者の「文学回帰」といえる一冊だ。作家を論じる上で、著者は「対論」という方法を取った。安部公房vs三島由紀夫、開高健vs大江健三郎、村上龍vs村上春樹など、二人の作家を対比的に取り上げることによって、彼らが互いを意識しながら活躍した時代の空気を蘇らせ、当時の社会における作家と作品の相互作用を浮かび上がらせてくれる恰好の文学ガイドであり、生きた文学史となっている。

とりわけ魅力的なのが、まさに文学の「現場」を彷彿とさせる記述である。小林秀雄、三島由紀夫、大江健三郎、吉田健一らの特徴的な原稿用紙の使い方にはじまり、三島の自決の際、庄野潤三宅にいた筆者に、庄野夫人が「あなた、大変」と知らせた話、脳溢血で倒れた後の上林暁が仰臥のまま書いた原稿のゲラを、作家の前で読み上げ、傍らで通訳してくれる上林の妹・徳広睦子とともに汗だくになって校正し、当の上林がまわらぬ舌で「新人も大変だが、旧人の方がもっと大変なんだよ」と呟いてニヤリとした話など、まさに生の証言が随所にきらめいている。

なかんずく精彩を放つのが、「車谷長吉vs平野啓一郎」の章である。他章とは



前田速夫著  
 「対論 現場の作家たち」  
 「新潮」元編集長は語る  
 (2025.11.30刊 河出書房新社)

異なり、世代も含め、全てに対極的な両者を対比させたことに、まず意表を突かれるのだが、じつは、この二人の才能を最初に見出したのが、著者その人であった。車谷とは、新潮社に持ち込まれた原稿「なんまんだあ絵」に瞠目して以来、長い雌伏期も励まし続け、生涯の盟友となった。一方、全く無名の学生であった平野啓一郎の「日蝕」の「新潮」巻頭一挙掲載を英断し、あのドラマチックなデビューを演出したのも前田氏だった。氏が両者に注目したのは、第一に書き続ける意欲とその潜在能力を疑わなかったこと、第二にその反時代性であったという。共に新人の頃から、時の流行とは全く別のところで、書くことを命とする資質を持っていったのだ。

昨春開催した「車谷長吉展」の高橋順子氏との記念対談「私だけが知っている車谷長吉」(姫路文学館紀要)29号所収で、前田氏は、本や文学をめぐる現状に憤りを示した。同時代、さらに新時代の作家たちの確かな蓄積を肌で感じて来たからこそその憤りであった。その熱量が、本書にもみなぎっている。「周囲が暗ければ暗いだけ、文学は光を増す」という著者の言葉を胸に、すぐにでも未読の作品に向き合いたくなる、気魄の一冊だ。(竹廣裕子)

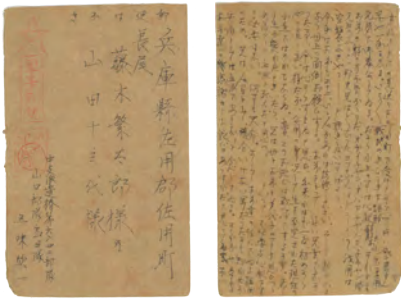
## 作家五味康祐の戦争体験

若し小生が斃れたときいたら、兄は母とお前と美代子の事を思ひつ、兵隊として立派に死んだと思へ。

作家五味康祐（一九二一～一九八〇）は、派兵先の中国大陸から内地の妹十三代に宛てて一通のはがきを出した。

——といっても、不必要な心配をする必要はない。何事も天命。そしてお前達の住んである祖国のため。兄は、人間として随分いけない男だったかも知れぬが兵隊としては立派でありたいと念じてゐる。それがせめてものお前達への感謝とお詫びのあらはれだと思つてゐる。

そう手紙は続く。表にはペン書きで「郵便はがき」、赤鉛筆で星印に「軍事郵便」とあり、検閲



山田十三代宛書簡・表、裏 館蔵

済のスタンプが押され、差出人として「中支派遣樁第六八四二部隊山口部隊島田隊五味欣一」と記されている。軍部より支給された軍事郵便はがきでなく、手元にあった

紙をはがきにしたと思われる。裏面には端正な文字で、死を覚悟していると言いつつたような口ぶりで、妹に余計な心配をかけまいとする兄の姿がうかがえる。

昭和十八年（一九四三）八月、教育召集を受け兵庫県の篠山連隊に入隊し、五か月間、重機関銃兵としての訓練を受け、除隊となった。教練の出席日数不足で進級できず早稲田大学を中退し、その後、徴兵逃れのため明治大学に入るも、昭和十九年（一九四四）五月、第二補充兵として応召し、中国大陸へと派遣された。

五味は、樁第六八四二部隊第二大隊機関銃中隊（樁は第三十四師団の通称、部隊名は編成のたびに変わった）に配属される。部隊が長沙（現在の湖南省長沙市）、衡陽（同衡陽市）、来陽（同耒陽市）などを攻略した後で、常寧（同常寧市）に進出する前のことだった。

軍隊生活については、「もう一度魔笛を吹け」「先生哀号」「軍旗燃ゆ」などの小説に書かれている。ひ弱な文学青年だった五味は、日本三強の連隊といわれた篠山連隊で教育を受けていても、使われるにならなかったと振り返る。

桂林への急進撃でそんなインテリ逸見二等兵の憔悴ぶりを見て、こいつは自殺するぞと思ったのは林大尉であった。林大尉は第二大隊つきの軍医だが、軍人精神よりはヒューマニティの横溢した人だった。部隊が全縣付近に駐留して小康を得たとき、林軍医は、機関銃の軍曹を呼び、逸見に暗号教育を受けさせてみよと言った。（略）

逸見二等兵は直ちに連隊本部に派遣され、各大隊から集まった兵らと暗号教育をうけた。わずか二十日間の教育だったがここで彼はその驚くべき奇才を発揮した。〔先生哀号〕

作中の「逸見」は五味本人。暗号兵となると才能を発揮し上官から重宝がられ、軍隊生活は少しましなものになった。

電文中の加算の誤りなら容易く発見し修正はできる。しかし鍵に誤謬があれば先ず解読はのぞめないが、羅列された数字の、どれが鍵に相当し如何なる誤謬が犯されたかを発見するのに逸見二等兵は天才的能力を発揮した。彼は学徒出陣の、補充兵であった。脚を怪我して跛をひいていた。だがその奇才を嘉して大隊長山内少佐は彼を側から手放さなかった。——お蔭で、「階級サイテー」の二等兵の身で、時に苦力の担架に担かれ彼は強行軍から落伍せずに済んだ。〔先生哀号〕

小説には送信側が間違えた電文、受信側が間違えた電文のいずれをも鮮やかに解読してみせる場面がある。暗号の試験官は「お前は文科系ではなかったか」と驚いた。

部隊のおかれた状況も厳しいものがあつた。大隊約三百名の内、軍装が整つた者は五十名に満たなかったという。ほとんどが現地で調達したあり合わせの服と靴、階級章と野戦帽は手製という有り様だった。

食糧も一年近く支給がない。そのため部隊では山に隠れた農民を探し出しては米を作らせ、彼らを守ることで食料を得た。これが部隊の宣撫工作（本来は現地人たちが敵対行動に走らないようにする融和策）だった。手榴弾を使って川で魚を捕ったり、難民といっしょに川に橋を

架けたりしたことも書かれている。昭和二十年（一九四五）八月、部隊は九江（現在の江西省九江市）付近で終戦を知った。

どういわけか敵は何処からも撃つてこなかった。あとから想えば八月十五日なので、敵側が攻撃をかけてこない道理である。（略）

その日はつがなかつた。部隊は適当な場所に野営し、翌黎明、ふたたび前進をはじめた。

（略）翌日も前進はつづいた。翌日も。強行軍なのは言うまでもなかったが鬼神もこれを怖れてか敵の来襲はなかった。そうして八月十九日、青天の霹靂ともいうべきワガ軍無条件降服セリの悲報に部隊は接したのである。〔軍旗燃ゆ〕

終戦を知った部隊は南京まで約五百キロメートルを歩いて移動し、南京郊外の收容所で捕虜生活を送った。

「先生哀号」で林軍医が「どうしてお前は幹部候補生を志願しなかったのか」とたずねている。学歴、能力を見て不思議に思ったのだろう。

自分には軍隊は自信がありませんでした。

逸見はそう答えた。

昭和二十一年（一九四六）二月、五味は復員を果たす。大学には復学しなかった。作家になりたい希望を持ちながらも、戦争で優秀な友人たちを失った喪失感、自分だけが生き残ったことへの罪悪感が、戦後の五味を苦しめることとなった。

## 友の会だより

■ボランティア会員見学研修会  
2月17日(火)

早春の淡路を訪ねて、野島断層保存館、淡路夢舞台公苑ほか、  
まず伊弉諾神宮に参拝、「陽の道しるべ」について当館ボランティア会員の



語り部によるお話



伊弉諾神宮

一人より説明がありました。野島断層保存館へ。セミナーハウスで阪神・淡路大震災のとき旧北淡町の職員として対応にあたられたという語り部の方から地震発生時に北淡町の人々がとつた行

動、倒壊家屋からの救助の様子や被災者支援など多岐にわたるお話を聞いた後に保存館で実際に断層を目の前に、力の加わり方やずれの方向などを解説していただきました。

午後は、建築家安藤忠雄氏が手掛けられた淡路夢舞台を訪れ、温室植物園「あわじグリーン館」や百段苑など安藤建築と緑の共演を楽しみました。

### ■友の会研修講座(ご案内)

第1回 5月9日(土)

『ぼおるぺん古事記』で読み解く『古事記』の世界

講師：兼岡理恵氏(千葉大学大学院人文学部教授)

▼会場 姫路文学館 講堂

▼時間 午後1時30分～3時

▼受講料 友の会会員は無料、非会員は500円

### ■2025年度友の会総会のお知らせ

5月27日(水)

午後1時30分～3時10分

第一部 総会

第二部 ミニコンサート

## 寄贈者一覧

左記の方々より資料の寄贈を受けました。(五十音順 敬称略)

池野まき子 小澤紘司 木割大雄 小島菜温子 佐藤岳俊 城公章 鄭義信 東海晴美  
中野隆之 茉莉亜まり

このほかにもたくさんの方々から資料を頂戴いたしました。誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

(令和7年12月11日～令和8年3月10日)

## 文学館日誌抄

(令和7年12月11日～令和8年3月10日)

12月11日 姫路城世界遺産登録日のため常設展無料開放。

第2回姫路文学館友の会理事会開催。

1月8日 第38回和辻哲郎文化賞(以下、「和辻賞」)一般部門選考委員会開催(於東京)。

1月11日 和辻賞学術部門選考委員会開催(オンライン)。

1月21日 兵庫県立こどもの館「手づくり絵本コンクール」審査会に甲斐史子副館長が出席。

1月28日 クラーク記念国際高校姫路キャンパス1年生が校外学習で来館。

1月29日 姫路市立山陽中学校2年生が班別学習で来館。

明石市立魚住中学校1年生が班別学習で来館。

2月4日 姫路市芸術文化賞第2回選考委員会に甲斐史子副館長が出席。

2月6日 明石市立大久保中学校1年生が班別学習で来館。

2月10日 第38回和辻哲郎文化賞受賞作を発表。

2月11日 兵庫県立こどもの館「手づくり絵本コンクール」表彰式に甲斐史子副館長が出席。

2月13日 姫路市立城東小学校6年生が校外学習で来館。

2月27日 姫路市立城東公民館・野里公民館の教養講座が企画展「戦後80年 戦時下の大衆文化 ―(外地)へのまなざしを振り返る」見学のため来館。

2月28日 和辻賞学術部門受賞者の渡名喜庸哲氏、見学のため来館。

## 播磨の文学界

■柳田國男生誕150年記念展「柳田國男展」日本民俗学の父と故郷の縁」開催。令和7年10月4日～12月7日 福岡町立柳田國男・松岡家記念館

■赤とんぼ歌碑建立60周年記念展「三木露風と赤とんぼ歌碑」開催。令和7年10月25日～12月14日 たつの市 霞城館

■高砂市出身の作家北野勇作氏による講座「100文字で小説を書いてみよう！」開催。令和7年11月22日・24日 高砂市立図書館

■明石市在住の作家鳥山まこと氏が、「時の家」により、第174回芥川龍之介賞を受賞。令和8年1月14日

■「郷土の詩人『坂本遼』の世界」展開催。3月6日～15日 加東市滝野図書館

■尾崎美紀詩集「真つ白な美しい骨」(空とぶキリン社)刊行。3月15日

■第48回姫路市芸術文化賞の芸術文化賞を小澤紘司氏(落語研究)が受賞。3月19日 姫路市 キャッスルグランヴィリオホテル 錦扇の間

■坪田政彦追悼展「このいろをみよ」(故金田弘との同名詩画集の原画等を展示)開催。3月21日～4月5日 姫路市 ギャラリーランズエント

### 訃報

樋口由紀子氏(川柳作家)

2月11日 73歳

## 予告

特別展 <sup>にしまきかやこ</sup>「西巻茅子 ララン ロロン すてきな げんがてん」

■会 期：2026年7月4日(土)～9月6日(日)

うさぎが着ている三角形のワンピースは、次々と模様が変わるふしぎなお洋服。西巻茅子さんの代表作「わたしのワンピース」は、着せかえ人形遊びを彷彿とさせるストーリーと、「ララン ロロン」と心が跳ねるようなリズムミカルなフレーズが楽しい不朽の名作です。

本作をはじめ、デビュー作『ボタンのくに』(なかむらしげお 文/こぐま社)や、洋画家であった父をモチーフにした『えのすきなねごさん』(童心社)、子どもの心に届くようにテキストの配置にもアイデアを出したという『はけたよ はけたよ』(神沢利子 文/偕成社)など、西巻さんによって創り出された絵本は、子どもの無垢な感受性や好奇心、個性の開花する成長の歩みに寄り添う深い愛情にみちています。

本展では、豊かな色彩と、リトグラフ・水彩・刺しゅうなどの多彩な手法で描かれた作品の数々やラフスケッチも展示しながら、そのあたたかくのびやかな絵本の世界へいざないます。心の原点に触れるような作家のイメージをぜひお楽しみください。



「わたしのワンピース」1969年  
©西巻茅子/こぐま社

## 予告

## 令和8年度(2026) 展覧会のご案内

■特別展 漫画家生活30周年 こうの史代展

～鳥がとび、ウサギもはなて、花ゆれて、走ってこけて、長い道のり～

前期 2026年4月18日(土)～5月10日(日)

後期 5月13日(水)～6月21日(日)

アニメ「この世界の片隅に」の原作者としても知られる漫画家こうの史代の10代から最新作まで全タイトルの漫画原画や挿絵、絵本の原画、作品のコンテ、愛用品などを網羅し、漫画の可能性を探り続けるその長い道のりをたどります。



《この世界の片隅に》2007年  
©こうの史代/コアミックス

※5月12日(火)は、展示入替のため、常設展のみとなります。

■特別展 西巻茅子

ララン ロロン すてきな げんがてん

2026年7月4日(土)～9月6日(日)

「わたしのワンピース」や「ボタンのくに」など、世代を超えて愛され続けている数多くの作品を生み出してきた絵本作家・西巻茅子。本展では、リトグラフ、水彩、刺しゅうなど、色彩だけではなく、多彩な手法で描かれた作品やラフスケッチを展示し、あたたかくのびやかな西巻茅子の絵本の世界へいざないます。

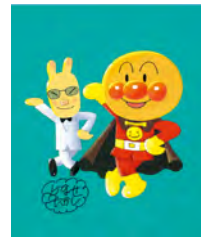


「えのすきなねごさん」1986年  
©西巻茅子/童心社

■特別展 やなせたかし展 人生はよろこばせごっこ

2026年9月19日(土)～11月23日(月・祝)

アンパンマンの生みの親・やなせたかし(1919～2013)の初の大規模巡回展。各地で大盛況の全国巡回の最終会場として、その掉尾を飾ります。やなせたかし記念アンパンマンミュージアムが2026年に30周年を迎えることを機に、原画約200点を中心に、「やなせたかし大解剖」「漫画」「詩」「絵本/やなせメルヘン」「アンパンマン」のテーマでやなせたかしの生涯と作品をひもときます。



「やなせたかしとアンパンマン」(部分)  
©やなせたかし(公財)やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団蔵

■企画展 生誕140年記念 詩人有本芳水展



2026年12月12日(土)～2027年3月22日(月・振休)

大正から昭和にかけて、子ども向けの雑誌「日本少年」の編集者として、読者参加型の企画や自作の抒情詩などで絶大な人気を集めた詩人・有本芳水(現・姫路市飾磨区出身、1886～1976)。読者の声を受けて編んだ『芳水詩集』は350版を重ねたと伝わります。その生涯と作品を主に当館の収蔵資料で紹介します。



## 利用案内

- 開館時間 午前10時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日は開館)  
休日の翌日(土日の場合は開館)
- 入館料 450円 [南館は無料]  
※18歳未満(18歳の誕生日から最初の3月31日までにあるものを含む)の観覧料は無料です。  
(年齢がわかるものをご提示いただく場合があります。)  
※特別展は別料金となります。※30名以上の団体は2割引
- 交通機関  
JR・山陽電鉄姫路駅より神姫バスターミナル9、10、17、18番のりば(一部停車しない系統があります。ご確認ください)乗車6分  
「市之橋文学館前」下車、北へ徒歩4分  
6番のりばで城周辺観光ループバス乗車10分  
「清水橋(文学館前)」下車、西へ徒歩3分

姫路文学館   

手帖 姫路文学館 第139号

(平成3年7月1日創刊)

令和8年(2026年)4月1日発行

編集・発行 姫路文学館

〒670-0021 姫路市山野井町84番地

TEL (079) 293-8228

FAX (079) 298-2533

e-mail/kyo-bungaku@city.himeji.lg.jp

http://www.himejibungakukan.jp/